

僕たちは神母ノ木に住まう。

大西 柁路

指導教員 渡辺 菊真

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. 設計の背景

1-1 大学と地域

近年、地域の国公立大学では、研究・教育に加え、地域活性化の拠点としての役割が期待され、産学連携や地域連携事業が推進されてきた^[1]。

大学が主体となり、企画やプロジェクトを通じて地域活性化に取り組むことは重要であるが、大学の主たる人材である学生自身が地域を知り、地域に住み、日常的にいきいきと過ごす姿が地域の風景として表れる。このことが、より自然で持続的な地域活性化につながるのではないかと考える。

1-2 高知工科大学のある地域と学生の住まう場

土佐山田町は、物部川を境に西側と東側の二つの領域に分けられる。西側の領域には中心市街地が広がり、東側の領域には高知工科大学と神母ノ木が位置し、大学と地域が近接した一つの領域となっている。

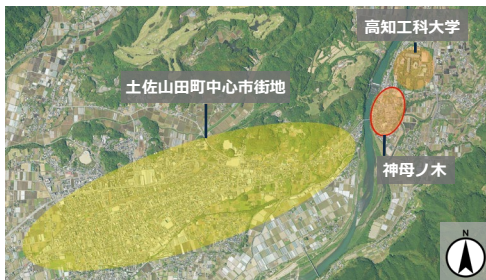


図1 土佐山田町と学生の住まう場
国土地理院に図形、文字を加筆して記載

高知工科大学に通う学生の住まう場は、①土佐山田町中心市街地、②学生寮、③神母ノ木の三つに大別できる。多くの学生は①土佐山田町中心市街地に居住し、②学生寮は大学敷地内に位置している。一方、③神母ノ木では学生の住まう場は少なく、アパート形式の住居が点在する状況にある。また、神母ノ木は大学直近にあり、学生が関

わる可能性を持ちながらも、人口減少や空き家の増加により地域の衰退が進んでいる。

大学と同じ領域に位置する神母ノ木において、地域を知り、体感しながら学生がいきいきと生活できる住まう場を作ること、神母ノ木を活性化できないだろうか。

2. 設計の目的

本設計では、神母ノ木に住まう場を計画する。

住まう場を通して、学生が地域の中で生きている実感を持ちながら生活し、いきいきと過ごす姿が神母ノ木の風景として表れる。その風景が神母ノ木に活気をもたらすことを目指す。

3. 神母ノ木という地域

3-1 神母ノ木の概要

神母ノ木は、高知県香美市土佐山田町に位置し、物部川に沿って形成された地域である。かつては物部川を渡るための交通の要所、水運を生かした物流の集積地として栄えるとともに、人の往来を受け入れてきた歴史を持つ^{[2][3]}。

3-2 神母ノ木の読解

神母ノ木は、香我美橋から南側に位置する a.本村、北側に位置する b.北、住居が段丘上に並び、高台に桑畑が広がる c.段丘と高台の三つの空間に分類できる。

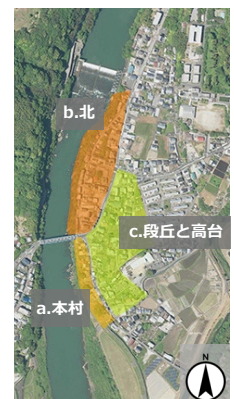


図2 神母ノ木の領域
地理院地図に図形、文字を加筆して記載

a. 本村

本村は、オモテを物部川、ウラを街道とし、両者は里道で結ばれている。住居は物部川に向けて構えられ、街道側には軒の低い建物が連なる。物部川を生活の中心に据えた暮らしが営まれていたことを、現在でも読み取ることができる。



図3 物部川に向けて構える住まい



図4 街道に並ぶ軒の低い住居

b. 北

北の領域は、街道をオモテとする。街道に面して町家が並び、物部川に張り出す懸造は街道に面して住む強い意思が現れている。また、町家は街道に対して豪華な構えであり、旅宿として使われていた。街道を生活の中心に据え、多くの人を受け止める場所であったことを読み取ることができる。



図5 街道に向けて並ぶ住居



図6 物部川に張り出しながら並ぶ住居

c. 段丘と高台

段丘と高台の領域では、段丘上に建物が並び、その間を里道が通る。里道はさらに高台へとつながり、段丘の上には畑が広がっている。生活と生業が地形に沿って形成された様子を読み取ることができる。



図7 段丘上の地形と里道



図8 高台から住居を見る

4.設計の条件

- 4-1 住まう場は a,b,c の 3 領域に 1 つずつ計画する。
- 4-2 対象とする敷地に既存の住居がある場合は改修し、活用する。
- 4-3 住まう場は各領域の特徴を実感できる場とする。
- 4-4 住まう場は共同で生活できるよう、シェアハウスとする。
- 4-5 シェアハウスのうち、コモンスペースを 4-3 の空間とし、個室は必要最低限の空間とする。

5.設計の手順

5-1 敷地の選定と理由

3つの領域の特色が強く表れている場所で、かつ生活が風景に表れやすい敷地を選定する。

領域 a 物部川に向けた二段の石垣を持つ空地

物部川を向く二段の石垣は、本村が物部川を向いて生活した様子を現在に伝えている。隣接する里道では、街道と物部川、その間に住居が並ぶ本村の構造を体感できる。これらの要素を生活の中に取り込むことで学生は、物部川を中心とした暮らしを日常的に体感できる。



図9 二段の石垣を持つ空地

領域 b 空き家となった町家と隣接する空地

町家は旅宿の風貌を持ち、神母ノ木北の街道の人の繁栄を現在に伝えている。隣接する空地は、街道に面して多様な活動風景を開示できる空間である。街道と空地の関係を生かして、学生の生活が街道ににじみ出る住まいが可能になる。



図 10 空地と連続する町家

領域 c 空き家となった民家と上段に隣接する空地

上段に隣接する空地は里道同士を繋ぎ、段丘に抜けを生んでいる。また、その下にある民家は里道に正面を向き、里道と民家の間にはニワが設けられている。この上下に連なる空間を生活の中で行き来することで、段丘と里道に沿った暮らしが体感できる。



図 11 空地によって生まれる抜け

5-2 機能と空間の計画

領域 a 物部川に向けた二段の石垣を持つ空地

コモンスペースは、里道に沿い、上段と下段を横断する形で計画する。

個室は、二段の石垣のうち、下段に計画する。

領域 b 空き家となった町家と隣接する空地

コモンスペースは、空き家となった町家を改修し、計画する。一階を万人に対して開き、二階を住まう学生の空間とする。

個室は新たに空地に計画する。コモンスペースと町家の間にはニワを計画し、それを半屋外空間の回廊で取り囲む。

領域 c 空き家となった民家と上段に隣接する空地

コモンスペースは空き家となった民家を改修して計画する。コモンスペースの前面には、ニワを配置する。

個室は上段に隣接する空地に計画する。

6.設計の内容

領域 a 物部川に向けた二段の石垣を持つ空地

二段の石垣を横断するように架けられた切妻の屋根は、里道へ誘導し、その先の物部川へ向かう動きを促す。また、里道をアプローチとすることで、物部川と街道双方に向かう意識を生む。

コモンスペースは、里道に向けて開口部を開くことで、領域 a の特色に触れながら生活できる。その様子が街道や里道から見えることで、学生の生活が風景化する。



図 12 二階平面図



図 13 里道から物部川へ誘導するボリューム

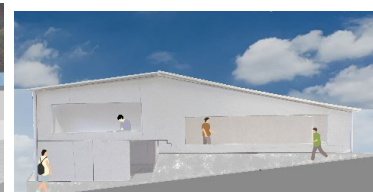


図 14 里道に開く風景

領域 b 空き家となった町家と隣接する空地

半屋外空間は街道に沿って配置され、街道に建物が並ぶ様子を見せる。

改修した町家は街道に対して開き、ニワを囲む半屋外空間を通して、学生が集う様子が風景化する。



図 15 一階平面図



図 16 街道に開く風景

領域 c 空き家となった民家と上段に隣接する空地

コモンスペースは、改修によって民家の一部を土間化し、前面にあるニワとの接点をつくる。個室は上段に隣接する空地に配置し、細長いボリュームとすることで、空地が生む里道同士の抜けを支える。学生の移動は個室とコモンスペース間を里道を介し生活することで、その姿が風景化する。



図 17 一階平面図



図 18 空地の抜けを支える
住まう場のボリューム

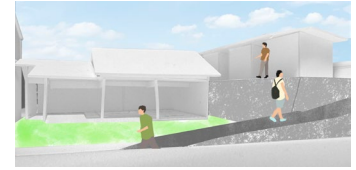


図 19 里道へ開く風景

7.まとめ

神母ノ木の各領域の特色に寄り添いながら、学生の生活する姿が風景化する住まう場を計画することができた。これをきっかけに、大学と同じ領域にある神母ノ木に活気が取り戻されることを願う。

8.参考文献

- [1]文部科学省 中央教育審議会 大学分科会.これからの時代の地域における大学の在り方について -地域の活性化と地域の中核となる大学の実現-. 2021.https://www.mext.go.jp/content/20220112-mxt_koutou01-000019888-001.pdf.
- [2]山田堰記録保存調査委員会.山田堰物部川水利史.土佐山田町.1984.
- [3]土佐山田町史談会.土佐山田史談 第 24 号. 土佐山田史談会.1999
- [4]国土地理院